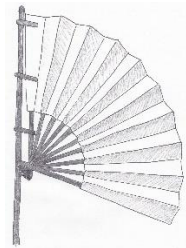


ひらつか歴史ばなし その七

## 将軍家茂、馬入川を渡る

—江戸時代末期—



「なんだって、この馬入川ばにゅうがわ（相模川さがみがわ）に橋を架かけろだって」

「なんでも、今度、二四〇年ぶりに、将軍さまが直々じきじきに京都へ上のぼるそうだ」

時は文久三年（一八六三）二月、十四代将軍徳川家茂いえもちの上洛じょうらくが、東海道とうかいどうの各宿場しゆくばなどに伝えられました。数年前に、外国との国交を開いたことから国内は乱れていました。

「ということ、天子さまてんし（孝明天皇こうめいてん）にお会いになるのかい」

「そうよ、天子さまは將軍さまの義理ぎりの兄さんだ。外国人たちを追っ払うことを話しに行くそうだ。たいそうな人数をひきつれていくというんで大勢を渡す橋が必要ってわけだ」  
話しているのは船頭せんとうの与助よすけと留吉とめきち、場所は、馬入の渡しかわかいしよの川会所です。

馬入川は、江戸時代には橋が架かっておらず、渡し船わたぶねを使っていました。船着場ふなつきばは中島村（現茅ヶ崎市）と馬入村にありました。川会所には、船をこぐ船頭たちと川を渡すための事務をする川名主かわなぬし、川年寄りかわどしよりたちがいつも詰めていて、馬入村にありました。

「でも、橋を架けろって言ったって、広くて流れの速いこの川に、簡単にはできないだろう」  
「まあ、普通じゃあ無理だろうな」

「ならどうするんだ」

「船橋ふなばしを架けるんだよ。三代將軍（徳川家光）いえみつさまが、上落したときや朝鮮通信使ちようせんつうしんしが来たときには、これで渡したそうだ」

「そりやなんだい」

「川上に舳先へびさきを向けて船を横に並べ、その上に板を渡すんだよ」

「船を橋げた代わりに使うわけだ」

二月十三日、江戸城えどじょうを出た家茂の行列は三〇〇〇人で、道中、家茂は駕籠かごや馬に乗ることもありましたが、自身の足で歩くこともありました。

十五日午後二時過ぎ、馬入川にやってきました。川には船橋が渡されていて、その先に富士山が望めます。左の手前に見えるのが高麗山こまやまで、右手には大山おおやまの雄姿があります。

家茂は、駕籠から降りおその風景を眺めました。

「おい留吉、あの白い陣笠じんがさをかぶっているのが、將軍さまらしいぞ」

船橋を渡つてくる行列を対岸の馬入村から見ていた与助が言いました。

「ずいぶんお若い將軍さまだ」



このとき、家茂は十八歳でした。

それまで、将軍や大名などの行列が通過する

ときは、土下座<sup>どげざ</sup>などで顔を伏せ直接見ることが

できませんでしたが、このときは、将軍の姿を見てもよいという命令が出されていたのです。

家茂一行は、馬入川を渡ると平塚宿<sup>ひらつかしゆく</sup>で一休

みして、その日は大磯宿<sup>おおいそ</sup>に泊まりました。

月日は流れ、二年後の慶応元年（一八六五）、

長州征伐<sup>ちゆうしゅうせいばつ</sup>のため将軍家茂は、また、馬入川に

船橋を架けました。今度は、何万にもものぼる大

軍勢を率いての上洛です。

「おい、あの金ぴかの陣笠が將軍さまじゃあないか」

このとき家茂は、金色の陣笠をかぶり、陣羽織じんぼおりを着て、馬に乗り、金の扇おんぎの馬印うまじるしを掲げていました。

「ずいぶん立派わかむしやな若武者になりましたね。実に堂々としたもんだ」

その後、家茂は一度江戸にもどりますが、慶応二年、再び長州征伐の軍勢を率います。このときは船を使い、馬入川を渡ることはありませんでした。

戦争の途中、指揮しきをとっていた大坂城おおさかじょうで病死します。まだ二十歳でした。

作・画／平塚てづくり紙芝居の会 たもん丸